

# 現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.147 IT社会の今

## 私たちの情報環境が歪められつつある

フェイスブックでは3月に入って、ユーザー5000万人の情報不正に利用される事態も発生、世界最大のSNSサイトは大きな試練に見舞われている。2016年の米大統領選でロシアからの介入を許してしまったことをきっかけに、フェイスブックばかりでなくIT企業が運営するメディア・プラットフォームのあり方が再検討を迫られているが、それは同時に、私たちを取り巻く情報環境が大きく歪められつつある現実を浮き彫りにした。

### 『IT社会事件簿』パートⅡ

私は2013年に『IT社会事件簿』(※1)

という本を書いた。インターネットが普及し始め、インターネット元年とも言われた1995年以降、2013年までに起こったIT絡みの事件をなるべく忠実に記録すると同時に、その意味を私なりにまとめたものである。最初が「青酸カリをめぐるドクター・キリコ事件(1998)」、最後が「米政府による大規模諜報活動告発(2013)」で、全部で26件の事件事故を取り上げた。

その後の出来事で「事件簿」として取り上げてもよさそうなものを見ると、たとえば、ラインでのやりとりがもとで、広島県呉市で16歳の少女らが仲間の少女を殺して山に放置した事件(2013)、YouTubeでの世界的なニコ太郎人気(2016)、神奈川県座間市で自殺志願の女性8人が次々に殺された猟奇事件(2017)などが思い浮かぶ。

特徴的なことは、事件そのものよりも、新しいツールが現実世界にじわじわと浸透し、社会の根幹を変えつつあるという点である。私自身は、インターネット上に氾濫する情報の信憑性が急速に薄れていることが気になっていた。本欄でもキュレーションサイト閉鎖騒動(2017)を取り上げたが、人びとから正しい情報を伝えるという姿勢がどんどん希薄になっている。ブログが話題になれば、ブログ運営サイトから金が入る、

Googleからも金を得られる、YouTubeで人気コンテンツを公表すれば日々の生活ができる、などなど。そうなると、情報が正しいことよりも、気をひくような突飛なネタのほうがいいわけで、たとえばタレントの話題にしても、こいつはヒットすると思うタイトルで、ネットから拾った話題の寄せ集めだけでつくっているページもあるし、嘘でもヒット数が上がればいいと無責任な情報を垂れ流す人も多い。まさに

「今様メディア百鬼夜行」である。

しかし、これは人びとをそういう方向に向かわせる現代メディア・システムにこそ問題がある。そして、そのきわめて大規模な、国境を超えた異常事態こそフェイスブック事件だった。『IT社会事件簿』パートⅡを書く機会があるとすれば、これこそ特筆すべき出来事である。

### 「情報の終焉」という警告

サイバー燈台の若い仲間から教えてもらったのだが、「フェイクニュース危機を予言した男、今度は『情報の終焉』を警告」(※2)というレポートがある。アビブ・オバディアというアメリカのコンピュータ科学技術者の意見を紹介したもののだが、記事によると、彼はアメリカ大統領選が終盤にさしかかった2016年11月、サンフランシスコのベイエリアで、差し迫っている偽情報による危機を「情報の終焉(Infocalypse)」「information(情報)」と「apocalypse(世界の終わり)」を組み合わせた造語」と名づけて、警告したという。

フェイスブックやツイッター、Googleのようなプラットフォームは、情報そのものの質よりも、クリック数、シェア数、広告収益を高く評価する。プラットフォーム化され、アルゴリズム的に最適化された世界

(※1)『IT社会事件簿』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2013年)

(※2)「フェイクニュース危機を予言した男、今度は『情報の終焉』を警告」

[https://www.buzzfeed.com/jp/charliewarzel/the-terrifying-future-of-fake-news-1?utm\\_term=.eb1PxVMmq#.mcL1kpQqb](https://www.buzzfeed.com/jp/charliewarzel/the-terrifying-future-of-fake-news-1?utm_term=.eb1PxVMmq#.mcL1kpQqb)

やの・なおあき / 1966 年朝日新聞入社。79 年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88 年『ASAHI パソコン』初代編集長。『月刊 Asahi』編集長の後、95 年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97 年総合研究センター主任研究員。2002 年朝日新聞退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03 年 4 月から 06 年 3 月まで明治大学法学部客員教授。06 年 4 月から情報セキュリティ大学院大学客員教授。07 年 4 月から 12 年 3 月までサイバー大学 IT 総合学部教授。著書に『インターネット術語集』（岩波新書）『サイバーリテラシー概論』（知泉書館）『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』（知泉書館、2009 年度大川出版賞受賞）など。最新刊『IT 社会事件簿』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）では、IT の進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。

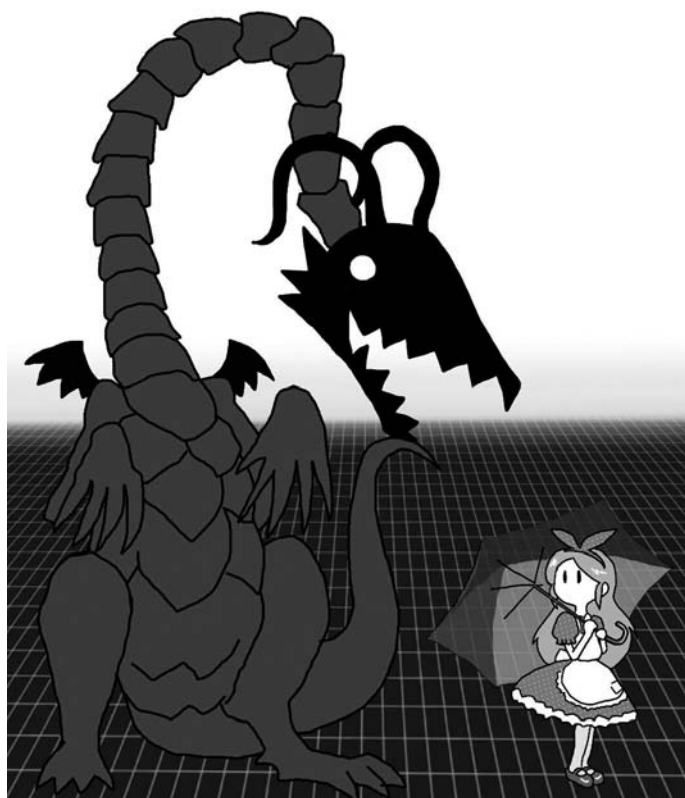
**ウェブ「サイバー燈台」** 本連載「現代社会に潜むデジタルの『影』を追う」をめぐる意見交換が目玉です。読者のみなさんもぜひご参加ください。 右画面

**プロジェクト欄がオープン** サイバー燈台の「専門店街」の「プロジェクト」欄では、「映画史に見るサイバーリテラシー」「サイバー絵本」などのオリジナル・コンテンツのほか、「客員コーナー」として有識者の知見を紹介。【New】



## サイバー燈台

<http://cyber-literacy.com/>



ジャバウォックとアリスの不思議な邂逅

イラスト kkkkkkkkkkeeeiii

は、プロパガンダ、偽情報、外国政府のつくる悪質なねらいを定めた宣伝に対し、極めて弱い。そのため、人間のコミュニケーションで土台となる、事実に対する信頼性が脅かされている、と。

彼は取材に対して、「我々は、ほとんどの人が想像する以上に醜くねじ曲げられている。1 年半前にも徹底的にだまされたが、今はそれ以上に歪曲されている。そして、状況は悪くなる一方だ」と述べており、そこでは、「実際に起きたかどうか関係なく、誰もが何らかの事態を事実であるかのように捏造できる」「コンピュータ技術の発達に焦点が当てられている。たとえばアダルトビデオ出演者の体に

著名人の顔を合成して、フェイクポルノをつくれるとか、あらかじめ録画しておいた人物の顔をのりつけたビデオと、リアルタイムにスキャンする別人の表情の変化を合成することで、テレビ番組で話すりーダーたちのビデオを加工、実際には発言していないことを話す偽映像も捏造できるなど。

たしかにこれは恐ろしいことである。しかし私には、直接的な技術による情報の捏造と同じように、あるいはそれ以上に、オンライン上にフェイクニュースがあふれ、私たちが知らず知らずのうちにその情報を信じ込みつつあるという現実のほうが、日常的に広く行われているこ

とだけに、より一層、不気味に思われる。しかも一方で、最近のデータ不正利用事件のように、無邪気に「いいね！」「ボタンを押している私たちの個人情報、最初は学術利用として合法的に抽出され、それが後に不法に調査会社に流されている（このイギリスの調査会社は、米大統領選でトランプ陣営が利用していたという）。

## 何が真実を見分けられない

情報の真偽が見分けにくくなっている。オバディア氏は「技術の発達スピードは、我々がそれを理解し、コントロールしたり影響を弱めたりする能力の向上を上回っている。文明的な社会の中枢が揺るがされたり、転覆されたりして、『情報の終焉』に至る」と警告している。

ではどうすればいいのか。彼は「技術が人間に役立つよう、確実にバランスをとらせるために、ただ『こういう事態が起きようとしている』と叫ぶのではなく、『深刻に受け止めて、影響を考察しよう』と話している。私の述べていることは、『そうならないだろう』と信頼している。『う』ということだ」とのみ語っている。

もの足りないと思う人もいるだろうが、現実を知ることがまず大切である。「覚すれば失す、体の異変に気がつければ、その異変は消えていく」という言葉もある。サイバー空間がいまどうなっているかについてのリテラシー（サイバーリテラシー）を持たなくては何も前に進まないのも確かである。